広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第50号　2001　281－290

社会心理学のディスコース

第3報　現代社会心理学の性格

吉　森　　護

(2001年9月28日受理)

Discourse in Social Psychology(3): The character of the current social psychology

Mamoru Yoshimori

In this paper we discuss on the characters of current social psychology by examing their theoretical, conceptual, and epistemological foundation. They have been the position of scientism for long period after Watson's Revolution of Behaviorism. Then, many questions and criticism toward traditonal scientific social psychology were put forward in the periods from 1960 to 1970. Following those criticism , many new powers in social psychology, like cognitivist, humanity psychologist, social constructionist, and ethnomethodologist appeared. Then, social psychology are changing into diverversity or chaotic state. The end of this paper we propose the need of discussion about what social psychology is, and the construction of emic social psychology of Japan.

Key Words: discourse in social psychology, social constructionism, emic social psychology

キーワード：社会心理学のディスコース、社会的構築主義、イーミック社会心理学

1．学としての性格が曖昧な社会心理学

社会心理学の独自性はどこにあるか　アメリカの代表的な社会心理学者で、『社会心理学史』(1954) を著したオールポート（Allport, G.W.）は、かつて社会心理学について次のように述べた。

「社会心理学の関心の焦点は、個人の社会的性質という点に置かれている。…社会心理学は何よりもまず、一般心理学の一分科である。したがって、その強調する中心問題も一般心理学と同じく、人間のうちに存在する人間性である。人間の精神生活は、つねに「他人の現実の存在、あるいは想像上ないし暗黙の存在」によって影響されるものである以上、心理学はすべて社会的でなければと主張する学者もいる。このように主張しようと思えばいくらでも主張することができる。しかし、実際には、いくら主張しても価値がない。精神物理学、知覚の過程、情動作用、記憶時間、パーソナリティの統合の性質などの問題のように、社会性を考慮に入れることとは別個に解決する必要のある人間性の重要な問題が沢山ある。したがって、社会心理学は、一般心理学と重複する部分をもってはいるが、しかし、けっして同一視することはできないものである。」(オールポート 1954　p．7.)

彼は、社会心理学が一般心理学の一分科であり、その関心が個人の社会的性質にあり、かつ社会心理学には固有の観点と理論およびデータがあると述べた。さらに、他の学問領域との関連に関しては、社会学、(文化) 人類学、政治学をそれぞれ社会構造・社会変動・文化類型などに関する包括的法則を探究するものとし、それらは社会心理学より「高次の」問題を扱う学問であるとして、社会心理学と区別した。この彼の言明が、その後の社会心理学のディスコースになっており、現代でも、基本的に、それは変わりない。

それにしても、彼の言う人間の社会的性格とは、どういうことを言うのか？　曖昧である。例えば、安藤ら (1995) はわが国における代表的なテキストを著しているが、その中で、「社会心理学とは」の説明にあたって、「気温が高くなるほど、プロ野球の試合でデッドボールが多くなる」(Reifman et al. 1991)、「空気中に陰イオンが増加すると、自分と類似した意見をもつ他者に好意を感じる傾向がいっそう顕著になる」(Baron 1987) という研究例を紹介している (文献略)。確かに、野球選手の行動も対人関係における他者への好意も社会的行動である。しかし、気温といい陰イオンといい、純粋に物理的要因である。それらの因果関係のどこに人間の社会性があるのか。言うまでもなく、これらの行

動には多くの要因が影響しており、その過程も複雑だと考えられる。それを社会的行動だからという理由で社会心理学研究として、しかも入門者に紹介する研究例としては適切であろうか。社会性を強調するというのと、社会的行動を扱うというのとは意味が違う。人間の社会的行動を扱っているからといって、それがすべて社会心理学ではなかろう。

社会心理学が誕生して既に100年にもなるというのに、未だに専門家の間でも社会心理学という学問が＜何を＞課題とし、＜いかなる＞方法を用いるのか曖昧である。それぞれの研究者が自らの＜人間とは＞、＜心とは＞についての自らの考えや立場を明らかにしないままで、具体的な課題に取り組んでいるからである。

わが国でも、「日本社会心理学会」、「日本グループ・ダイナミックス学会」のような専門学会が今まで社会心理学についての統一した定義を下したことはないし、はっきりとした社会心理学の独自性を提唱したこともない。

社会心理学の宿命的事情　社会心理学の曖昧さの最も大きな事情は、社会心理学の誕生と生い立ちに関わることである。この点については、既に、第１報でも紹介したので、簡単に触れるとして、社会心理学界には、系譜の異なるいくつかのセクト（学派）がある。その系譜を大別するならば、＜社会学系＞（社会学的社会心理学）と＜心理学系＞（心理学的社会心理学）、ないしは＜精神分析系＞（精神分析的社会心理学）の３つの立場である（グラウマン1994）。これらのセクトの間では、取り組む問題も方法もまるで異なった学問のように違う。しかもそれらの間に相互の交流がほとんどない。各セクトは、それぞれ独自にテキストをつくり、後継者を再生産しているから、いっこうに統合されないし、その兆しもない。社会心理学は誕生以来、この同名異学の存在に学としてのアイデンティティに悩まされてきた。もともと社会心理学は＜学際（境界）科学＞であり、心理学、社会学、精神分析などの出身者の間でその考え方に大きな差異があるのは当然である。問題は、これらの学派間に何らの会合地盤や交流がないことである。

わが国の場合、社会心理学に関心をもつ者の数がまだ少ない時代には、「社会心理学会」にも多様な学問（社会学、政治学、経済学、文化人類学など）出身者が一堂に会合しており、論議してきた。今やほとんど心理学出身者一色になってしまっている。

社会心理学の科学主義的体質　社会心理学の性格が曖昧であることにはその他にもいくつかの事情がある。

社会心理学に関する合意、とくに心理学的社会心理学におけるそれは＜科学＞であろうとしてきた点であろう。「社会心理学は科学である」という言説が、学界内部外部を問わず、一般に認められてきたし、現在も基本的に変わりない。

これまで、社会心理学は＜科学的に＞、それも＜自然科学のように＞研究をすすめるという意味で、ことさら科学であると謳い、科学であろうと懸命に努めてきた。社会諸科学（人文科学も含めて、社会学、文化＝心理人類学、政治学、経済学、地理学など）の中でも社会心理学の科学志向は目立って強い。そのことは、実験的方法やデータの強調、事象の因果関係（メカニズム）の解明を目指すタイプが多いこと、論文の記述に自然科学流のデータの数量的分析や表現が多いことなどから容易に確認される。論文のスタイルも多くが自然科学型である。このような心理学的社会心理学の「科学主義」[1]的体質は、親学問である心理学から承け継いだものであることは間違いない。

「何を」より「いかに」を重んじてきた社会心理学

社会・人文科学の中でも社会心理学は研究方法への関心が強い。研究方法に関する導入書も多く、テキストもたいていは＜科学＞の説明から始められている。といって、それによって科学の意味が明確になっているわけでもない。この（科学的）方法へのこだわりは、結果として、＜何を＞問題にするかよりも＜いかに＞扱うか方法を重視する一因にもなっている。それが「些末実証主義」[2]と批判されている社会心理学の問題点も生んできた。

伝統的に心理学的社会心理学の大方の研究は、物理学など自然科学が拠って立ってきた「論理実証主義」（あるいは「経験的実証主義」）の立場を採ってきた。最近では、加えて、コンピュータを駆使した「統計主義」と表現しうる傾向が顕著に認められる。社会心理学は、いま、統計的（確率論的）な決定論の立場[3]に立ち、ゆるぎない普遍的な知識の探求とその蓄積を目指している学のように見える。

科学観の変化　社会心理学が拠って立つ「科学」に対する見方、つまり科学観あるいは科学に対するイメージが近年急速に変わってきている。

振り返れば、この100年間に、科学についての考え方（言説）はかなり変わった。一般社会においても、とくに20世紀に、自然科学がめざましく発展し、それが有益だと考えられていた時期には、人々は「科学」に絶対的信頼を寄せていた。心理学も社会心理学も、その対象や問題の特殊性にも関わらず、科学に憧れ、科学たらんとしてきた。

実質上の社会心理学の出発点であるヴント[4]の時点はともかく、その後社会心理学は心理学におけるワトソン（Watson, J. B.）らによる「行動主義革命」[5]を受け容れ、しばらくの間、積極的に物理主義・客観主義・

普遍主義の立場に拠ってきた。「実験」社会心理学が全盛期の時期がしばらく続いた。この間、社会心理学を含めて心理学は「行動の科学」[6]と定義された。

ところが、1960年代後半から1970年代前半にかけて心理学界に新たな変化が起きた。この時の変革は、一般社会におけるコンピュータリゼーションや情報化の波を迎えてのもので、認知科学の出現にあやかって、「認知革命」と呼ばれる。それまでの行動主義（新行動主義を含む）に代わって、コンピュータ・メタファーによる認知主義心理学が盛んになった。社会心理学界にも当然のように、＜認知ブーム＞が到来した。質問紙を用いた実験や調査による「イージー・ゴーイング」な社会心理学研究が盛んになった。もっとも、その本質は、かつての行動主義時代の＜科学主義＞のままで、変わりなかったが。

時代はもはや科学を絶対視しなくなっており、心理学が科学であると強弁しなくてもよくなっていた。そのため、例えば、「人間性心理学」など、新たな問題と方法を用いる自由なる（社会）心理学が提唱されることになった。周辺の社会学などからの影響もあり、社会心理学では、「雨後の筍」のようにさまざまな立場が乱立した。

社会心理学における新興勢力の台頭　現在までの30年間、社会心理学関連領域では、マスロー（Maslow, A. H.）らによる「人間性心理学」[7]、ガーフィンケル（Garfinkel, H.）らによる「エスノメソドロジー」[8]、ゴフマン（Goffman ,E.）による「演劇論的アプローチ」[9]、タジフェル（Tajfel, H.）らによる「社会的アイデンティティ理論」[10]、ガーゲンらによる「社会的構築主義」[11]などが提唱され、社会心理学は多彩になった（文献略）。このことは、社会心理学者がそれまでいかに鬱屈していたかをよく示している。それらの新勢力は、従来の行動主義（新行動主義を含む）心理学に疑問や不満を抱く者たちだった。彼らは、それまでの心理学や社会心理学が拠ってたってきた「論理実証主義」あるいは「経験的実証主義」を痛烈に批判し、否定した。そうした批判は、哲学界における「科学は西欧社会のイデオロギーに基づくものだ」、「科学だけが知の探求の方法ではない」など、脱西欧中心主義や科学の相対化の動きが背景にあった。科学主義の心理学のもとでは、扱いかねていた理論や概念が復活し、新たな学説が出されることになったのである。

科学モデルの変化　社会心理学における伝統的勢力と新興勢力の間では、科学モデルが大きく違う。伝統的な社会心理学では、人間行動に関する普遍的法則を見い出すために、トップダウンの実証的方法を採用してきた。社会心理学者も自然科学におけるような科学哲学（客観主義、要素主義、経験主義、決定論）をもって、実験や推計学といった方法を用いてきた。彼らは、自らが設定した独立変数と従属変数の間における普遍的な一般的関係を見いだすことを目標としてきた（図１）。

図１　伝統的（社会）心理学における因果関係の実証モデル（Kim 2000）

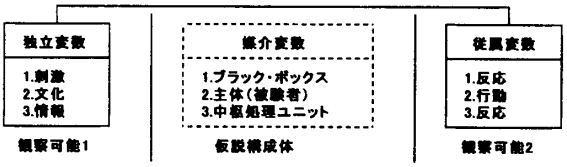
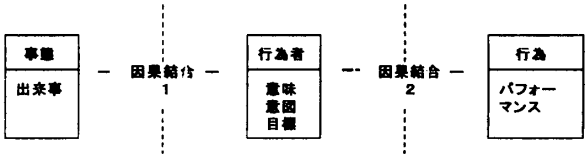


図２　新しい社会心理学における因果関係に関する「取り引きモデル」（Kim 2000）



対して、新興勢力の科学モデルはかなり違う。もちろん、新興勢力といっても上述のように多様で一括りには出来ないが、その大方の主張では、従来の考え方では観察できない人の内面（行為者としての意図や意味や目標）が事態（状況）と出来事あるいは行為を結びつけるモデルを採用している。この新しいモデルを「取り引きモデル」（transactional model）と名付けたキムによると、図２のように表すことができる。図では、まず、第１段階では、個人がある出来事（事象）をどのように認知（知覚）し、解釈するか（因果結合１）問われ、そして、第２段階でその認知と個人のパフォーマンス（行為）が結びつけられる。

現在までのところまだそれぞれの新興勢力はけっして多くはない。ただ、そのインパクトは大きく、これからの社会心理学に影響を与えることは間違いなかろう。社会心理学にも確実に変化の兆しが現れている。例えば、研究対象が新たに「行動」から「ことば」に変わりつつある。ただ、社会心理学はこれらの新しい立場（勢力）を加えて、その性格がますます曖昧になっていることも確かである。

【注】

1．科学主義（scientism）というのは、近代自然科学的な認識方法を最高の方法とみなす見方のことである。この立場の特徴は、対象を純然たる「客体」として捉え、実験的・数学的方法によってその従う法則を解明しようとし、そしてこの立場に従わない認識方法を「非科学的」あるとで切り捨ててしまうところにある。科学主義の問題点については、ストラッサー1964（徳永恂・加藤司訳　1978　人間科学の理念新曜社を参照。）

2．些末実証主義というのは、伝統的社会心理学に対する批判の１つで、科学主義の社会心理学の研究は経験科学として実証を重んじているが、とるに足らない些末な問題を採り上げているに過ぎないとの批判である。

3．決定論（determinism）とは、世の中の現象は一意的に描写でき、一時点での状態が与えられれば、それ以降の状態が一意的に決まるという考え方である。決定論は、科学の前提である。人間の意識や行動がその肉体、とくに大脳の物的状態にほぼ一意的に対応すると研究者もいるが、決定論が成立するかどうかは論理的に飛躍がある。とくに、人間の意識や行動に関しては、主体の側の「自由」あるいは「選択」の可能性がある限り、決定論的見方には無理がある。決定論と自由の問題は、神学では＜神の摂理＞の問題、社会科学では＜主体性＞や＜歴史の法則性＞の問題として論議されている。モノの世界でも決定論が成立するのは、いわゆるマクロの事象に関してであって、量子力学の世界では非決定論が確認されている。そんなことから、最近では、「柔らかい決定論」が主流になっている。（伊東 1971 参照）

4．内省（introspection）は、内観、あるいは自己観察とも言われる。内的な意識過程に関する自己観察に基づき、人間心理を分析・説明しようとするアプローチである。心理学史においては、アッハ（Ach, N. K.）による組織的・実験的内省法を記憶、思考、意志などの研究に適用したキュルペ（Kulpe, O.）が有名である。内省法に関しては反対も少なくない。その１つは、精神分析学からのもので、彼らは人が内省し自覚できるのはごく限られた一部に過ぎないと言う。また、行動主義者は、内省法によって得られた資料には客観性の保証がないため、科学的研究法としては使えない、という。

5．ワトソンは行動主義者の見地から、心理学が純粋に客観的実験的な自然科学の一部門であり、その理論的目的を行動の予測（prediction）と支配（control）にあると考えていた（今田 1962）。

6．英語の behavior ということばには、もともと、「行為、行儀、品行、振る舞い、態度」といった、人間の行動の意味と、「（生物の）習性、（物の）性質、作用、（機械などの）働き、反応」などの意味がある。すなわち、behavior はモノにも人間にも用いることばである。ワトソンが「行動主義」（behaviorism）を提唱した時、そして、当時の心理学者が behavior ということばを受け容れた時、そこには、人とモノを同じことばで扱いうるとの期待があったのではないか。論理実証主義の哲学者が、いみじくも「それは一口に言って無機物モデルを人間にまで及ぼそうとするもの」だと書いているが、ワトソンの行動主義の隆盛や心理学における行動概念の定着については基本的に同じことが言えるのではないか（早坂 1978）。

7．Maslow は、伝統的心理学においては、Freud 流の「精神分析」を第１勢力とし、Watson や Skiner に代表される「行動主義」的立場を第２勢力とする２大勢力が縄張りを占めており、このままでは、良心・罪の意識・愛・責任・理想・希望・ユーモアなどの人間の特徴である全体像が解明されないとして、新たに「人間性心理学（humanity psychology）」を提唱した。

8．社会学者、Gerfinkel は、伝統的な手法に代えて、社会学者や社会心理学者の構築した概念や理論を通して現実社会や出来事を眺めるのではなく、「市井の人々（エスノ）」がそれらをどうみて、どう解釈しているのか、さらには行動をどう構築しているのかに注目する必要があるとして、人々の枠組みや手続き、ルールなどを＜現象学的＞に記述する方法として「エスノメソドロジー（ethnomethodology）」を提唱した。

9．社会学者、Goffman は、現実社会における人々の相互作用がちょうど劇場の舞台で演じられるドラマと同じであって、人々はさまざま工夫して、互いに印象操作を行っていると解釈し、社会心理学の主題である相互作用が演劇における俳優の演技やその演出法の観点から把握しうるとして、「演劇論的アプローチ」を提唱した。

10．Tajfel らのグループがイギリス、ブリストル大学で討論した結果にもとづいて、提唱したもので、社会における個人は所属する集団あるいはカテゴリーの成員性でもって自己を定義し（メタ認知過程としての社会的アイデンティティ）、個人はそれに基づいて社会的行動をし、心理的特徴をあらわすとする理論である。ターナー（Turner）らは、「自己カテゴリー化理論」としてこの理論をさらに拡張しているが、両理論は基本的には同じである（ホッグ他　1988）。

11．社会的構築主義といっても多様であるが（Gergen 1985）、概ね次のような非常にラディカルなスタンスをとる。①彼らは、これまで自明であると考えられてきた心理学的知識も絶対的・普遍的ではないとし、伝統的な実証主義や経験主義と呼ばれてきた立場を否定する。②現実世界を理解する仕方、つまり概念やカテゴリーは、歴史的・文化的に構築されたものと考える。③知識は社会的行為を伴う。

2．社会心理学における新しい勢力の台頭

『歴史学としての社会心理学』　その嚆矢となった論文がガーゲン（Gergen, K. J.）による『歴史学としての社会心理学』（1973）だった。彼は、その論文で、心理学を含む社会心理学の知識が時代的（歴史的）および空間的（文化的）に限定的なものであると述べた。そして、結論的に、社会心理学は科学というより「歴史学」だとの衝撃的な主張をした。その論拠として、例えば、有名なフェスティンガーの「認知的不協和理論」（cognitive dissonance theory）を挙げた。その後追試しても、当初のような結果が得られなかったというのである。彼は、社会の状況や人々の行動は、時代とともに変化するので、社会心理学が人々の意識や行動について、自然科学のように、＜決定論的知識＞や＜普遍的法則＞を求めても意味がないと断じたのである。ガーゲンは、社会心理学をある時代における人々にとっての現実の世界がいかなる存在かを把握し、説明する学だと言い切った。

社会的構築主義の登場と伝統的社会心理学批判　上述のように、社会心理学（心理学的社会心理学）の主流は行動主義から新行動主義を経て、現在は「認知主義」となっているが、その伝統的立場に真っ向から対立する＜新しい勢力＞が「社会的構築主義」者たちである。しかし、彼らは徒党を組んでその立場を主張して登場したわけではない。「脱構築」、「ポスト構造主義」、「批判心理学」、「ディスコース分析」などといった哲学的タイトルを掲げて登場した個別の面々である。それらを最大公約数的に「社会的構築主義」（social constructionism）[(1)]と括っているに過ぎない。だから彼らの立場は個別的にみれば微妙に異なっている。

彼らによれば、心理学者はいつのまにか、近代の科学主義に呪縛されて、自然に、自由に考える力を失ってしまっている（ガーゲン1994）。例えば、エスノメソドロジストで、『心の社会的構成』（1998）の著者、クルター（Coulter, J.）は、伝統的な（社会）心理学における操作主義の限界について次のように述べている。

＜心＞という概念やその他の心的な述語を操作化するこころみには、原理的困難がつきまとっている。それは当の現象そのものを見失ったり、あるいはそもそも探求を始めるきっかけとなった問題との結びつきを失ったりしかねないというものである。心のことを物理世界からの入力のうえに操作を加える一組の変換関数といったふうに定義するならば、ただちにその概念は勝手なしかたで境界づけられることになる。「心」という概念はそもそも言語使用の世界のなかで機能しており、すでにそのなかでその概念はそれなりに境界づけられているはずだ。だから、（…）。定義にしたがって、理論的な人工物の諸条件やかかる人工物間の諸関係を特定化してみたところで、結局、そんな特定化はもともとはじめにあった概念の意味内容とどこまで一致するものか、わからないままである。…。
（クルター 1979　p. 17.）

社会的構築主義の見解の特徴　彼らの主張は、現段階では、まだ評価する段階ではなかろうが、新しい社会心理学の言説なので、イギリスのバー（Burr 1995）に従って、その主張を概略してみたい。

第１に、伝統的な心理学や社会心理学が目指してきた、人間や社会についての「客観的で歪みのない観察」による知識の存在を否定することである。社会的構築主義者は、伝統的な科学の基本的な拠り所である「実証主義」や「経験主義」そのものに疑問を抱き、それらを否定する。また、返す刀で、存在するものは＜人が存在すると認知するもの＞だとする「認知主義」の前提も切り捨てる。代わって、彼らが主張するのは、人々が世界を把握する概念やカテゴリーが必ずしも実在に対応していないということである。具体例をあげれば、世間では音楽を「クラシック」と「ポップス」と分類するが、その区分はもともと音楽自体の特質によるものではなく、社会的になされたことばによる＜約束事＞に過ぎないように。同様に、人間を「男」と「女」に分けるのも自然発生的な意味での本質的なタイプ分けではない。「背が高い」と「背が低い」でもよいではないかと。

第２に、ふつう人間や社会を理解する仕方やその際使用するカテゴリーや概念は、普遍的なものではなく、＜歴史的＞・＜文化的＞によって決められる＜相対的＞なものだと考えることである。いかなる観点から世界を理解するかは、人がいつ・どこで生活してきたか、現に生活しているかによって決まるのだと。その証拠に、例えば、アリエス（Aries, P. 1960）が指摘するように、＜子供観＞は時代や社会（文化圏）によって大きく違うではないか[2]。その意味で、人間や社会についての見方は文化と歴史の所産だと考えられている。しかも、その見方はある時代のある文化に支配的な社会的・政治的・経済的しくみや制度に依拠している。ディスコース論では社会の支配層がそれを生み出し、社会に広めているとみなす。どんな文化にも独特の＜知識体系＞があり、自分たちの理解の仕方が他のそれよりも優れているなどと考えるべきではない、とする。

第３に、知識を人々の間の＜言語＞による日常の相互作用によって構築されたとみなすことである。現在われわれが認めている人間や社会についての理解は、けっして科学的で客観的な観察によるものではなく、祖先が長年にわたって築き上げた＜社会過程＞の所産であると見る。その意味で、社会心理学は＜ことば（言語）＞の研究、とくに「ディスコース（言説）分析」[3]をする必要があると主張する。モスコヴィッチ（Moscovici 1984）は、同じ事をいかなる認識も「社会的表象」[4]を通してでしかあり得ないと表現している。

第４に、知識が社会的行為を伴っているとみなすことである。人々の間で協議されて構築された知識は、もはや単なる知識ではなく、行為（対応）を生ぜしめる力をもつ。人がことばで人を動かすことからわかるように、ことばには力が備わっている。例えば、「酔っぱらい」への社会的対応は、歴史的に見れば禁酒法制定以前には＜個人の責任＞とされ、ただ非難されるだけだったが、禁酒法制定後には＜投獄＞となり、さらにその後に「アルコール依存症（中毒）」という＜病気＞と確認されるようになり、医学的・心理学的治療の対象になったことなどはこのことを如実に示している[5]。

バーは以上の点を含め、社会的構築主義者の主張を次のようにまとめている。

(1)**反本質主義**：伝統的心理学のように、人間の行動や社会に「本質」があるとは考えない。個人の「パーソナリティ」や「態度」などといった本質的概念を否定する。伝統的心理学は本質の存在を前提にその実態を「真理」として、追究し続けてきた。代わりに、社会的構築主義は反本質主義の立場から、人間の行動や社会を人々の間の＜言語による相互作用＞の所産と考える。

(2)**反実在論**：社会的構築主義は事象を客観的事実とは見ない。言い換えれば、知識が実在の知覚に基づくことを否定する。代わって、あらゆる知識がある＜パースペクティブ＞から世界を見ることで生まれると見なす。伝統的社会科学が目指してきた「真理」の探求を否定し、全く異なった新たな知識モデルを提出する。

(3)**知識の歴史的および文化的特殊性**：社会科学を含め、社会心理学の理論と説明は時代・文化拘束的であり、人間や社会について普遍的・決定論的な記述は出来ないとの立場を採る。ガーゲンが大胆にも「社会心理学は歴史学である」と述べた（Gergen 1973）のはその意味だった。

(4)**思考の前提条件としての言語**：われわれの人間や社会についての理解は、客観的実在からではなく、過去から現在までの社会における人々が使ってきたことばによる概念やカテゴリー、ディスコース（言説）から生まれる。それらの概念やカテゴリー、ディスコースは言語能力を発達させるにつれて学習し、獲得する。この言語やディスコースがわれわれ人間の思考の前提条件になっている。

(5)**言語の使用は社会的行為である**：伝統的社会心理学では、言語を単なる思考や情動の伝達の道具（手段）と見なしてきたが、社会的構築主義は、言語使用自体を重要な社会的行為であると見なす。人々が言語によって相互作用するところに社会が構築されると。

(6)**相互作用と社会的慣行への注目**：伝統的心理学は、＜個人の内部に＞認知・動機づけ・態度・パーソナリティなどの＜本質的概念を設定＞して、社会現象の説明をおこなってきた。また伝統的社会学は、経済や結婚や家族といった＜社会構造＞や＜制度＞からさまざまな社会現象を説明してきた。社会的構築主義者はこれら双方の基本的立脚点（仮定）を否定し、人々の間の日常的な相互作用と言説にみられる社会的慣行に注目する。

(7)**ダイナミックな社会的相互作用過程への注目**：社会的構築主義者は人々の間の＜ことばによるダイナミックな相互作用＞過程に注目する。すなわち伝統的心理学が態度やパーソナリティなどによって、また伝統的社会学が経済や社会の構造や制度といった＜静的＞な実体概念で説明してきたのとは対照的に、＜動的＞過程に注目する。（バー　1995　p．7-12.）

社会的構築主義者は社会心理学研究の主たる拠り所を「ことば」や社会の「ディスコース」に求める。それは、伝統的な社会心理学（行動主義）とはまったく異なる、いわば不倶戴天の相違であると言えよう。

社会的構築主義への疑問、そして伝統勢力の反応

社会的構築主義の登場は、それが伝統的な社会心理学と余りに異なるために、多くの社会心理学者に衝撃と

戸惑いをもたらしている。何しろ、従来の考え方をほとんどすべて否定しているのだから。

この新しい立場にも疑問や批判がないわけではない（中河1999）。そうした疑問や批判には次のようなものがある。

1．社会的構築主義者は社会問題の「実態」から目をそらし、原因探求を放棄しているとの批判。社会的構築主義者は、実際に存在するというより、研究者や専門家がカテゴリーを設定したり何らかの言説で問題化すること（「クレイム申し立て」）で社会問題が構築されると考える。例えば、「登校拒否」というカテゴリーとその定義が人々に知られ、使われるようになるまでは「長期欠席」や「怠学」はあっても「登校拒否」はなかったとする。しかし、クレイムや言説の対象となる「実際の」出来事や事柄は存在するはずだ。社会構築主義者はことばやその「主観的」側面しか見ようとしないではないか、との批判である。
2．社会には「クレイムの申し立てのない問題」もあるが、社会的構築主義者はそうした問題を扱えないではないかとの批判である。人々に十分認知されていないため、あるいは何らかの権力が働いて申し立てられないようなケースがあるのではないか。
3．社会的構築主義者は、申し立てられたクレイムを何らの価値判断も加えないで、記述し、分析するというが、そもそもそれは不可能ではないかとの批判である。社会的構築主義者は科学的データさえも、科学の理論や研究の手順とその準拠枠を使った科学者の営みによって作り上げられた一種の被造物と見る。社会的構築主義者は、社会問題活動に関わっている人たちとは別のやり方で、社会問題活動の過程について記述と分析を構築しようとしているだけではないのか。（中河　1999　p.46-55.）

新勢力の出現に対して、旧勢力はどう対応するか。その反応は３つのタイプに分けられよう。１つは、自ら反省し、白旗を振り、転向し、立場を改めるタイプ、また２つ目は社会的構成主義を認め自分たちとは「別（もう一つ）の」心理学として位置づけるタイプ、そして３つ目は、新勢力を「異端」勢力として全く無視するタイプである。いずれの態度で臨むのか。まだその最終的反応は表れてはいない。現状では、社会構築主義者はまだマイノリティである。しかし、その主張は力強い。

【注】
1．「構築主義」の原語には、２種ある。例えば、ブルーナーはconstructivismを用い、ガーゲンはconstructionismを用いる。本稿では、後者を採用した。
2．アリエス（Aries, P. 1914-1984）は、『子どもの誕生』（1960）を著し、その中で、近代家族の出現とともに、子ども期の観念が現れたと書いている。彼は、歴史的にはつい最近まで子どもは保護されるべき対象ではなく、単に「小さい大人」と見られていたことを指摘した（アリエス　1960）
3．バーは、ディスコースを「出来事の特定のヴァージョンを生み出す一群の意味、メタファー、表象、イメージ、ストーリー、陳述などを生み出すまとまっていることばの体系。ある出来事（人）について個人内に描かれる特定のイメージ。出来事をある観点から言語的に表現する特定の表現法」と定義する（バー1995）。つまり、ある社会において対象を構築することばの体系のことである。それは、ある事象（人）について特定の意味を与える人々の間の「常識、当然なこと、当たり前のこと、誰でも考えること」である。「ディスコース分析」とは、そのディスコースをその成立過程や意味、さらには機能の観点から分析することを言う。
4．社会的表象（social representation）とは、社会的対象が意識に映じた姿をいう。モスコヴィッチの社会的表象理論によれば、認識者の集合体はことばを通して表象を共同で制作しながら、それに束縛される。社会的表象とは別に、裸の事物が存在すると考えるの＜幻想＞である。
5．フランスの歴史家であり、哲学者であったフーコー（Foucault,M. 1926-1984）は、膨大な資料による綿密な論証によって、近代ヨーロッパ社会の歴史が、基本的に知＝権力として成立していたと指摘した。彼は、例えば、「狂気」がルネッサンス期まで寛容に扱われてきたが、その後社会から排除され、病院に閉じこめられるようになった歴史的過程を分析している。

3．現代社会心理学の性格

社会心理学の没価値性・没イデオロギー性　学問にはそれぞれ固有の性格、言い換えると固有のパラダイム[1]がある。それは学問の起源とその後の発展過程において多くの研究者が累々と築きあげたもので、「伝統」として世代から世代へと承け継がれていく性質のものである。

社会心理学の場合、上述のように、現在ますます混沌とした状況にあるが、ここで、現代の社会心理学の性格を概観してみたい。もちろんここに概観するのは、伝統的な社会心理学のそれである。

その前に、わが国の戦後の社会心理学のパイオニアである、南（1963）がかつて社会心理学の階級制とイデオロギー性に関して次のように述べている。

心理学の領分で社会心理学が大きく扱われるようになったのは、いずれも＜資本主義国＞においてであり、ソヴェート（旧ソビエト連邦）、中国のような社会主義国家では社会心理学という部門の存在はおろか、心理学者のあいだで、その名さえ出ることはなかったらしい。例えば、ソヴェートではやっと最近になって、「独占資本に仕える社会心理学」という題で、「アメリカ帝国主義のイデオロギー」として「独占資本に奉仕する」アメリカ社会心理学をシェリフの著書、『集団の調和と緊張』（1953）の内容を紹介するかたちで批判した論文[1]あたりから、「社会心理学」ということばが使われだしたのである。この批判は、なるほど基本的、原則的には正しいが、アメリカ社会心理学の中で、確かに積極的な意味をもつと思われる業績まで葬り去って顧みない傾きがある。いずれにしても、社会心理学が戦後の資本主義国で急に大きな要求にめぐりあったことは、社会心理学の性格について反省する際、念頭にいれておくべき前提である。【注】アルバトフ　1955　独占資本に仕える社会心理学『哲学の諸問題』第１号、p.185-188.（南　1963　p.22-23）

南が問題にしたのは、社会心理学の＜階級制＞ないしは＜イデオロギー性＞のことである。階級制というのは、特定の社会階級である資本家や支配層に仕える学としてスタートしたこと、また、イデオロギー性とは、特定の価値的、政治的立場との絡みのことである。ほぼ同様のことを、社会的構築主義心理学者、バーも指摘している。

一学問としての社会心理学は、第二次世界大戦中、アメリカおよびイギリスの政府に、プロパガンダと大衆操作に役立つ知識を提供しようとする心理学者たちの試みから、現れてきたと言ってよい。「どうしたら軍隊の士気を維持できるか？」「どうしたら人々がなじみのない食物をたべるよう仕向けられるか？」、こうした問いから、それは生まれてきたのである。それはまた、その親学問である心理学が、自然科学的方法を援用することによって自らの手で名声を得ていた、その時代に育った。したがって一学問としての社会心理学は、政府と産業双方の権力の地位にある人たちに習慣的に奉仕し、彼らから報酬を得る、経験主義的な、実験室に基礎を置く学問として現れた。（バー　1995　p.17）

南やバーは社会心理学の社会的デビュー時の経緯を根拠に、当時のそれが特定階級に奉仕する＜御用学的＞性格をもつことを述べたもので、現在では必ずしもそれが当てはまるとは言えないかもしれない。しかし、確かに社会心理学は社会学などと比べると＜無思想性＞、あるいは＜思想的無防備＞という性格をもっている。それは、伝統的な社会心理学の科学志向に起因していると考えられる。すなわち、社会心理学者は、科学者として、「脱価値」、「無色透明」、「中立」のつもりなのである。しかし、ガーゲン(1994)が指摘するように、社会科学としての社会研究や人間研究は脱価値・無色透明ではあり得ない。それどころか、積極的に「社会のモラル・エイジェント」の役割を果たしている。研究者自身価値づけて見てしまう面が多分にあることは否定できないし、現権力(支配層)を擁護したり、支配層に利用されやすい面があることは確かであろう。もともと、人間の「こころ」や社会の問題には、支配層が興味をもち、管理や統制のため、政治的色合いを帯びるものだからである。

私見ではあるが、社会心理学者(とくに心理学的社会心理学)はこのイデオロギー性にあまりに無防備に過ぎる。それは、社会心理学が隣接の社会学などに比べて、方法や手続きに重点をおき過ぎ、問題自体の分析、すなわち問題意識の深化を疎かにしているためであろう。科学志向の強い心理学者は＜学問と社会のつながり＞の問題を考えていない。対して、隣接の社会学では、学問あるいは知識と社会の問題を「知識社会学」[2]あるいは「科学社会学」[3]として深く論究している。要するに、社会心理学は人間のこころや社会の問題を扱う「社会科学」でありながら、配慮がなさ過ぎた(る)のである。

社会心理学の「没社会性」への反省　社会心理学の没社会性に関連して、もう少し、社会心理学的知識の社会への影響の問題を論じてみたい。

現代、社会が拡大・複雑化し、情報化社会が現実化するとともに、新たな事件や出来事（例えば、「ストーカー」、「セクハラ」など）が数多く発生するようになっている。否、これらは以前からあったが、新たにラベリングすることで事件や出来事として採り上げられるようになった。こうした事件や出来事でなくても、人々の行動様式や行動傾向が変容（例えば、子どもの「不登校」、若者の「社会的引きこもり」など）し、社会全体が「アノミー化」していく状況の中で、心理学ないしは社会心理学によるこれらの諸問題への関与ないしはその原因究明、さらには対処への期待が増加している。問題は、社会心理学者がどれだけ有効にこれらの社会的要請に応えられるかであるが、これまでのように、社会心理学者が大学研究室に籠もっていたのでは、その要求や期待に応えらないことは言うまでもない。社会からの期待に応えるためには、現場に赴き、現実の事例に直接触れ、当事者から話を聴かなければならない。残念ながら、隣接の社会学者とくらべ、社会心理学者は現場（フィールド）の中に分け入ることをしてこなかった。社会心理学では、目の前にいる大学生に質問紙調査を実施して、ことを済ますような研究が余りに多かった。もし、この社会心理学の没現場性に、研究者の養成システムや評価システムが関係しているとしたら、反省せねばならない。社会心理学とはいかなる学なのか再検討するとともに、従来の教育内容を改め、哲学や社会学を積極的に組み入れるなど、養成システムも改めなくてはなるまい。

社会心理学の性格　上述のように、社会心理学にはさまざまな立場の研究者がおり、いろいろな側面があり、混沌としており、一括し難いが、現在までの社会心理学の性格を整理してみたい。

1．社会心理学は、個人あるいはその集合体の行動（意識）のメカニズムやプロセスの解釈と説明を課題としている。課題は基本的に社会学など他の社会科学との間に本質的な区別はなく、「学際的科学」（interdiciplinary science）の立場をとっている。
2．一口に社会心理学といっても、その成り立ちや現在までの系譜、地域や研究者の出身によって、採り上げる課題やアプローチには、全くと言ってよいほど異なる種類がある。すなわち、アメリカとヨーロッパでも社会心理学についての考え方は異なるし、また研究者の出身（心理学か社会学かなど）によっても異なっている。現在の社会心理学には、①心理学出身者による「心理学的社会心理学」、②社会学や文化人類学出身者による「社会学的社会心理学」、さらには、③精神分析学出身者による「精神分析的社会心理学」などのセクト（分派）がある。これらの間に相互交流があまりない。アメリカやわが国おける多数勢力は、①の「心理学的社会心理学」のセクトである。
3．社会心理学の課題は、概ね、個人あるいはその行動とa.他の個人あるいはその行動(相互作用)、b.集団あるいは組織さらには社会システム、c.過去の集団活動の所産としての文化との関係(影響関係)を分析することで、個人の行動のメカニズムやプロセスを明らかにし、その合理的解釈と説明をすることと合意されてきた。社会心理学が個人心理学に堕していないかとの懸念がある。
4．概ね、社会学が分析の単位を＜社会体系＞、すなわち社会関係・集団・文化・制度などに置くのに対し、社会心理学は＜個人＞にその単位を置くとされてきた。しかし、その区別は相対的だし、社会体系を単位とする社会心理学があってよいのではないか。
5．社会心理学の研究や教育の目標は、自明とされ、明確にされてこなかった。
6．社会心理学は、単に学問的な＜理論＞の構築だけではなく、現実の社会問題解決に寄与する＜実践＞的知識の構築を目指している。その意味では、社会心理学者は社会問題の＜現場＞に赴く必要がある。
7．社会心理学はこれまで思弁や個人的独断を排除するためとして、問題設定を深化するための哲学的思索や取り扱いを軽視してきた。どちらかといえば、問題の重要性や研究の意義よりも研究手法に力点が置いてきた。このことが＜些末実証主義的傾向＞をもたらしてきた。
8．社会心理学は＜科学＞と呼ばれてきたが、課題や方法の性格上、広義の意味での科学であり、「自然科学」と同じではないことは明らかである。にもかかわらず、これまで「論理実証主義」の立場、すなわち自然科学流の取り扱い可能性と有効性を信じて、実験と調査などの「実証科学的」方法による観察と測定、なかでも＜数量化＞によるデータの統計学的分析によって得られる蓋然的知識の蓄積に努めてきた。「事例」観察や事象の「質的」分析の必要性が唱えられてはきたが、現実には、これまでは＜科学主義＞に立つ統計的な「量的」研究報告が圧倒的に多かった。

9．社会心理学は、自然科学の論理あるいは手法を模してきたため、素朴に事象に臨むというより、<抽象>と<捨象>によって予め研究者本位に、理論や概念や仮説を設定し、さらに操作的に設定した測度や指標間の関係を分析するというやり方を採ってきた。あまりにも<研究者本位>の概念と論理でもって事象（人）に臨んできた。

10. 社会心理学は、自然科学の論理あるいは手法を模して、事象を全体として扱うというより、抽象と捨象によって、要素に分割し、特定の要素、それも扱いやすい要素を引き出し、研究対象としてきた。そのため、研究者にとって取り扱いの容易な<些末な>問題が採り上げられることが多かった。

11. 社会心理学は、これまで「本質主義」の立場に立ち、過去の研究者が構成・設定したパーソナリティ、欲求、知能、態度などの概念によって組み立てられた説明図式を信じ、それらによって行動や社会事象が説明・解釈できると信じ、それらの概念や指標の洗練化・実証化に努めてきた。しかし、社会構築主義のような「本質主義」を否定する立場が現れた以上、今後これらに関する再検討が求められている。

12. 社会心理学は、自然科学を模して、普遍性・法則性を追求する姿勢で臨み、結果が特定の対象、特定の状況で得られたものとして扱うよりも、一般化して報告する傾向が強かった。また被験者の文化的背景や対象の特殊性、状況の影響を軽視してきた。そのため、わが国とは社会文化的事情の全く異なるアメリカなど外国で得られた結果をそのまま、注釈したり限定をせずに、テキスト等に引用し、紹介することが多かった。

13. 社会心理学は、個人の意識や行動の解釈や説明に当たって、個人が置かれている社会や場などの<状況要因>より、パーソナリティや能力、態度のような<個人的要因>を重視する傾向が強かった。行動の原因を<状況>よりも<個人>に帰することが多かった。これは多分に欧米の「モナド思想」の伝統に由来していると考えられる。

14. 社会心理学は、これまで観察の対象を言語より行為に置き、人の<言葉使用>や社会における<ディスコース>の問題に取り組んでこなかった。それは、従来の科学主義の心理学が客観的な観察が可能な「行動」指標を重視してきたためである。また、ことばの意味が従来の科学的手続きに乗らず馴染まなかったため敬遠されてきたためと考えられる。

15. 社会心理学研究においては、大学生が必ずしも一般社会人のサンプルではないにもかかわらず、手短に協力が得られるという理由で、大学生を被験者とする実験や調査に基づいて、研究が進められてきた。そのため、「大学生の社会心理学」と揶揄されている。

16. 社会心理学では、「作為標本抽出法」によって得られた比較的少数のサンプル・データの処理に、無作為標本抽出を前提としている「推測統計学」の手法を適用することを許容してきた。

17. 社会心理学研究では、実際は、多くの場合、現象や心理量が「非線形関係」にあり、たとえ科学的取り扱いをするとしても「複雑科学」としての取り扱いをしなければならないにも関わらず、依然として、「線形関係」を仮定した要因間の関係や因果関係の分析に終始している。

【注】

1．科学史家、クーン（Kuhn,T.S.）は、科学者は身につけた研究のモデルや考え方、すなわち研究における問題設定や解法のことを「パラダイム（paradigm）」と呼ぶ。そして、科学者はよほどのこと（危機）がない限りそのパラダイムを持続させる傾向があるという。危機的状況に対応してのパラダイムの変換が「パラダイム・シフト」、つまり科学革命である。彼によれば、科学史は、パラダイムの受容→通常科学（過去の科学的業績を受け容れ、それを基礎として進行させる研究のこと）→危機→科学革命→新パラダイムの受容→通常科学という動的プロセスで展開する。

2．知識社会学（sociology of knowledge）というのは、広義の意味での<知識>ないし<知的所産>が、その発生、機能、影響、妥当性などに関して、どのように社会的条件と関連するかを研究する社会学の分野ないしは方法。それを学問として、確立したのは、第一次世界大戦後、シェーラー（Scheler, M. 1874-1928）とマンハイム（Mannheim, K. 1893-1947）だった。最近では、アメリカのマートン（Merton, R.K. 1910-　）が取り組んでいる。マートンは、大衆の世論などに注目し、知識の機能、伝達、影響などの経験的研究をその課題として認めている。現在では、知識社会学は、社会学の一分野としてよりは、むしろ人文・社会科学全般の課題ないし方法として拡大されている。

3．科学社会学（sociology of science）とは、科学の社会的文脈や科学の社会構造の研究に重点をおく社会学の一分野。科学社会学は、広く(1)科学知識、(2)科学の社会的条件、(3)科学の社会的機能、(4)科学の社会構造（①科学の規範構造、②科学の機会構造、a．科学の報賞体系、b．科学の評価過程、③科学の観念構造）を対象領域として設定している。「知識社会学」にも寄与したマートンの貢献が大きい。

4．社会心理学はいかなる学か：論議の必要性

社会心理学はいかなる学かの論議　とくに「社会的構築主義」の登場は、人間と社会の問題を扱う社会心理学者にとって、単に方法論や研究上のテクニックの問題としてではなく、自らの存在自体を根本から考えさせられる好機会を提供した。社会科学の中にあって、社会心理学は人間の<こころ>と社会に関わる問題を直接扱うだけに、社会における人の存在の仕方やその福祉（ハッピネス）に直接関わる学問領域として、率先して人間の行動や社会の意味、個人と社会の関係を明確にすべく論議しなければならない。

いまわれわれが論議すべき問題は多い。社会心理学が扱うべき課題は何であり、それらの課題にいかに取り組むべきかである。

社会心理学者に限らないが、心理学者は総じて哲学を嫌い、哲学に近づくことを避ける傾向がある。それは心理学が哲学から最後に分離・独立した学問のせいかもしれない。今なお脱哲学入科学の思いがことさら強いようだ。あたかもやっと親から独立した青年がことさら親を避け、親に反発するようにである。

しかし、そんなことを言っている時ではない。高度情報化社会を迎え、われわれの耳目に達する情報量が格段に増え、人々の行動範囲が拡大し、行動様式や価値観が多様化し、人間関係が様変わりし、社会の疑似環境化とともに、社会の構造が複雑化し、変化がますます激しく加速化している状況が現出している。自らの存在自体が危機を迎えている。人間と社会の関係はかつてと大きく変わっている。社会心理学が取り組むべき課題も方法も今までままでよい筈がない。

確かに、クーン（Kuhn, T.S.）が述べるように、慣れ親しんできたパラダイムを手放し、自己変革することは難しい。しかし、伝統的社会心理学が拠ってきた足場（本質主義）が揺らいでいる以上、いま一度、原点に立ち返って、「社会心理学はいかなる学なりや」と考え、論議しなければなるまい。

「イーミック」社会心理学の必要性　社会心理学は、社会における人間のこころと行動という課題の性質上、さまざまなアプローチがありうるし、時代や社会（文化圏）によってその内容が異なるのは、当然のことである。だから社会心理学が扱う問題や扱い方に関して、

基準を設けたり、統一すべきだと主張するつもりはない。もちろん学説はいろいろあってよい。

しかし、上述のように、学問としての研究対象や方法の多様性や曖昧さは、<社会心理学のアイデンティティ>、つまり社会心理学が何を問題とし、それらにいかにアプローチするのかについて混乱をもたらしていることは確かだろう。巷間「社会心理学には何でもありだ！」、あるいは「独自な問題も手法も体系もない学問、雑学！」などと揶揄される所以にもなっている。

ここで主張したいのは、社会心理学に新たな区分のことである。もちろん、既に、非公式にせよ、社会心理学には、例えば、「児童社会心理学」や「教育社会心理学」のように、対象や課題、あるいは場所によりさまざまな社会心理学がある。しかし、肝心な人間研究における研究態度により仕切った社会心理学がないのである。

それは、言語学者パイク（Pike 1954）のいうイーミックとエティック（emic vs. etic）概念[1]による区分である。言うまでもなく、人間の意識や行動はある文化圏において特有な論理で引き出されるものである。多くの場合、アメリカ人の行動と日本人のそれは同じように見えてもその要因や論理は明らかに違う。ある文化圏内の特有な論理で引き出されたものはイーミックであり、通文化的なものがエティックである。いわばイーミックな社会心理学をうち立てなければならないと主張したいわけである。

イーミックの立場に立てば、人間行動はある文化の中で捉え、その役割や意味を記述しなければならない。現代の社会心理学には、このイーミックなものが抜けている。社会心理学は今までアメリカを中心に発展を遂げてきたし、現在もその中心地はアメリカである。過去はともかく、現在とこれからが問題である。現在までのところ、わが国やアジアにアメリカとは違う独自の社会心理学があるとはとても言えない状況にある。わが国の社会心理学界はアメリカの社会心理学に占領されていると言っても差し支えなかろう。

幸い、最近、アジアの社会心理学の確立しようとする動きがあるし、「アジア社会心理学会（Asian Association of Social Psychology）」も設立された。学会が設立されただけでは独自の社会心理学が確立されようとしていることにはならないが。その設立に当たった山口が次のようなコメントをしている。

「社会心理学は、元来、ヨーロッパに芽生え北米を中心発展した学問である。そのため、現在の社会心理学にはアジア的視点がないか、あるとしても非常に乏しい。欧米では合理性が尊ばれ、個人の権利と自律と独立という<個人主義的価値観>が存在する。一方、アジア、とくに東アジアでは徳による人間関係が重視され、個人は他者との調和（和）を重んじるべきだという<調和の価値観>が存在する。そうした文化の違いがあるのに、欧米の社会心理学をそのまま導入してもあまり意味がない。それぞれの文化に合った社会心理学を確立する必要がある。学問的鎖国主義を提唱したり、民族主義的価値観を強調するわけではないが、社会心理学であるがゆえに、まず自国の文化に妥当する原理に基づいた社会心理学を確立しなければならない。人間の「こころ」や行動は社会的状況＝文化に育まれ、規定されているのだから。」（山口　1998　p.11-19.一部変更）

韓国の社会心理学者、キム（Kim, U. 2000）は、文化心理学の領域についてであるが、「土着心理学（indigenous psychology）」の必要性を主張する。もちろん、アジアでも広すぎる。「日本」社会心理学をうち立てなければならない。

【注】

1．イーミックとエティックとは、アメリカの言語学者パイク（Pike, K.L. 1954）が用いたことばで、それぞれ、音素論（phonemic）と音声学（phonetic）の語尾部分に由来する。人間行動に関して、ある文化圏内に特有な論理で引き出された概念をイーミックと言い、通文化的な概念をエティックという。現代では、文化・行動研究一般における基本的態度ないし立場を意味するものとして用いられる（吉森　1995）。

5．社会心理学の研究と教育の目標の明確化

社会心理学の理念と目標　社会心理学がいかなる学なのかの論議の前でも後でもいいが、「何のために」社会心理学なのか、すなわち社会心理学の研究や教育の目標を明確化しなければならない。社会心理学の学としての理念や目標を考えるには、まず社会心理学が現代社会においていかなる役割を果たしているかを考慮しなければならぬ。トーメ（1980）は「現代社会における心理学の役割」を次のように記述している。すこし長くなるが、重要な指摘だと考えるので引用（要約）しておきたい。

1．現代、いろいろな生活領域において心理学への志向性が増大している。それで、文化哲学者やジャーナリストたちが<心理学的独裁>の危険を警告しているので、多くの人は不安に感じているに違いない。例えば、「企業において心理学の勢力拡大は人間関係の改善を口実に企業利益をもたらしているのではないか？」、「<宣伝>の領域で心理学的志向が強くなっているが、これは他人の私見を背後から奇襲するのと同じではないか？」、「パーソナリティの鑑別や求職者の適性検査、児童の進路をめぐるさまざまな測定は個人の態度を型にはめたり、均等化してしまう危険がありはしないか？」等、心理学の実践的利用が<人間の尊厳>を傷つけることにならないかと疑っている。

2．近年、「現代社会」とほぼ同義に「産業社会」なる概念が用いられる。経済的・社会的機構が合理化されたこの社会形態は、<機械化>ないしは<形式化>の帰結である側面が多い。すなわち、ややもすれば人々の個人的所与と個人的発達をある一定の平均基準に無理に適合させてしまいかねない面がある。あらゆる人間的問題を一定の基準（平均）に合わせて合理化し、均等化することが可能だと信じることは、文化哲学者や文化制作者たちの見解に従えば、人間の尊厳に対する、つまり人間存在の本来的なものに対する侵害である。実践的心理学がこの機械化や合理化に奉仕することは、あるべき学問精神に反しており、危険である。

3．心理学の目標は、つねに伝統や個人の直観的判断によるのではなく、<科学>に基づいた判断によって人々の生活態度の調整を行うことである。現代社会は技術的ないし経済的領域において、最高度にまで合理的方法を発展しながら、その一方では、例えば、職業相談、企業サービス、学校相談の内側、さらには私的生活における人間的問題の処理や解決を伝統や直観に任せてしまってい

るが、これは現代社会の矛盾である。

4．人間的問題の扱い方は簡単ではない。単純かつ自明のものと思われることが、心理学には非常に複雑かつ意味深い場合もある。そのため、心理学の見解が法律・医学・産業・教育などの分野の実践における見解と対立することもある。心理学は心的生活の形式化と均等化を助長せしめないだけでなく、このような見解に断固対決しなければならない。

5．心理学は、人間的問題を＜標準化＞して片づけてしまうベルトコンベアに心的なものを組み込むことに反対する最も信頼できる対抗力でなければならない。心理学者の最も重要な課題は、心的事象の複雑性を明示しようとする断固たる努力にある。そのため、何よりもまず人間の内面を標準化してしまうようなことに反対し、人間の内面の多様性を守っていく弁護人でなければならない。心理学者は、「心的事象の多様性を認容し、各個人の人間的運命の唯一性に配慮しながら、現世における＜牧職＞として行動する」べきである。心理学者の活動は、人が個人的問題を解決するとき、彼自身に備わっている理性の適用を断念しない限り、必要である。多様性を単一性に、差異性を同質性にしてしまうような現代社会の誤った合理主義に直面するとき、心理学は必要になる。その時こそ、人間的問題を図式化して片づけがちな社会に、心的内面の深さを悟らせるチャンスである。（トーメ 1977 p.8-15.）

今までわが国でも、多くの心理学や社会心理学のテキストが出版されてきたが、自明と考えられているためであろう、その目標についての記述はほとんど見あたらない。

かつて、大学改革に際して、筆者は、広島大学教育学部心理学科（現広島大学大学院教育学研究科心理学講座）で教室のスタッフとともに、学科の理念・目標を論議したことがある。その時まとめた理念・目標や倫理的基準を掲載しておきたい。抽象的に過ぎるかもしれないが、このように、理念や目標をことばにして学生に示すことで、心理学や社会心理学の学習に対する内発的動機づけを触発することが期待できるのではなかろうか。

心理学科の理念と教育目標

（1994年度　広島大学教育学部心理学科）

1．心理学コースの理念

広島大学教育学部心理学科では人間の行動の一般的原理を理解するために体系的研究法を用いる科学としての心理学を教育する。本学科の教育は、学生が将来それぞれの職業生活および活動の分野において、個人の尊厳と価値を尊び、基本的人権の保持と擁護に努め、人間の行動および社会についての知識と技能を活用し、個人と社会の福利の増進に貢献し、かつ人間科学としての心理学の発展に寄与することができるように、卒業時までに次の事項の達成を目的とする。

Ⅰ．将来いずれの領域に進路をとる者にも必要な人間の行動および社会に関する基礎的知識と基本的技能を習得させる。

Ⅱ．生涯にわたって発展させるべき、心理学の専門職に必要な基本的態度・習慣を身につけさせる。

Ⅲ．人間の行動および社会に関わる問題を正しくとらえ、自然科学的・人文科学的・社会科学的方法を統合して問題解決に当たる基本的考え方および能力を修得させる。

Ⅳ．自己の知識・技能・態度・行動力を自ら評価し、かつ自発的学習と修練によって、それらを向上し続ける習慣を身につけさせる。

2．心理学科の教育目標

（以下略）

社会心理学の研究と教育の目標（私案）

人間のこころと行動、およびそれが関わる社会現象を対象とする社会心理学の研究および教育の目指すところは、社会における人間のこころと行動の仕組みや過程を解明し、理解することによって、社会の人々の生きる活力と社会福祉の向上を図ることにある。社会心理学の目標は、個人のこころや行動を予測したり、何らかの目的のために、管理・統制することにあるのではない。

いかなる理由があろうとも、その研究は個人の尊厳と価値を尊び、憲法で保障されている個人の思想・信条の自由を冒すものであってはならない。

社会心理学の研究の目標は、人間および社会におけるこころと行動に関わる諸現象を可能なかぎり正確に、合理的な根拠に基づき「理解」し、「説明」するとともに、人々を惑わす俗説や偏見を排除し、既存の学説を「批判」し、質すことによってさらに合理的な知識や技術を形成・蓄積することにある。その成果としての知識や技術は公開され、特定の団体や個人にのみ帰属したり、利用されるものであってはならない。

社会心理学の教育は、人間のこころや行動に関する知識や技術を得させることによって、自らはもとより、他者とのよい人間関係を築き、家庭や地域社会、学校や職場、さらには全体社会など、あらゆる社会状況における人間の関わる問題解決に寄与・貢献するよりよき社会人を育成することを目標としている。

引用文献

アリエス 1960 杉山光信・杉山恵美子訳 1980 *子供の誕生* みすず書房

安藤清志・大坊郁夫・池田謙一 1995 *社会心理学* 岩波書店

今田恵 1962 *心理学史* 岩波書店

Elms, A.C. 1975 The crisis of confidence in Social Psychology. *American Psychologist,* **30**, 967 - 976.

小川一夫監修 1995 *改訂新版社会心理学用語辞典* 北大路書房

オールポート、G.W. 1954 高橋徹・本間康平訳 1956 社会心理学史社会心理学講座Ⅰ *基礎理論 (1)* 所収 みすず書房

Gergen, K.J. 1973 Social psychology as history. *Journal of Personality and Social Psychology,* **26**, 309 - 320.

ガーゲン 1994 杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀監訳 1998 *もう1つの社会心理学―社会行動学への転換に向けて―* ナカニシヤ出版

Kim, U. 2000 Indigenous, cultural, and cross-cultural psychology: A theoretical, conceptual, and epistemological analysis. Asian *Journal of Social Psychology,* **3**, 265 - 288.

グラウマン 1988 末永俊郎訳 1994 第1章 社会心理学史入門、ヒューストン・シュトレーベ・コドル・スティブンソン編 *社会心理学概論1* 所収 誠信書房

クルター ,J. 1979 西阪仰訳 1998 *心の社会的構成：ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点* 新曜社

Goffman, E. 1963 *Behavior in Public Places.* New York: Free Press.

ストラッサー 1964 徳永恂・加藤司訳 1978 *人間科学の理念* 新曜社

田中一彦 1996 *主体と関係性の文化心理学序説* 学文社

トーメ 1977 石田幸平訳 1980 *心理学と社会：その歴史と現代の課題* 新曜社

中河伸俊 1999 *社会問題の社会学―構築主義アプローチの新展開―* 世界思想社

バー 1995 田中一彦訳 1997 *社会的構築主義への招待* 川島書店

早坂泰次郎編 1987 *人間世界の心理学：日常経験の現象学的人間学をめざして* 川島書店

ブルーナー 1983 田中一彦訳 1993 *心を探して* みすず書房

ホッグ・アブラムズ 1988 吉森護・野村泰代訳 1995 *社会的アイデンティティ理論* 北大路書房

Potter, J. and Wetherell,M. 1987 *Discourse and Social Psychology: Beyond Attitudes and Behaviour.* London:Sage Publications

南博 1963 *社会心理学の性格と課題* 勁草書房

Moscovici, S. 1984 The phenomenon of social representations. In R.M. Farr & S. Moscovici (Eds.) *Social Representations.* Cambridge: Cambridge Univ. Press.

山口勧 1998 *三訂版社会心理学―アジア的視点から―* 放送大学教育振興会

吉森護 1995 イーミックとエティック 小川一夫監修 *社会心理学用語辞典* p.9. 北大路書房

吉森護 1999 社会心理学のディスコース：序報 なぜ、ディスコースが問題なのか *広島大学教育学部紀要* 第一部（心理学）第48号 69-78.

吉森護 2000 社会心理学のディスコース：第2報 本邦『社会心理学研究』誌における論文の内容 分析 *広島大学教育学部紀要* 第三部（教育人間科学関連領域）第49号 179-189.